

『朝花夕拾』の世界

— その連続性について —

永 末 嘉 孝

「朝花夕拾」は、周知の通り、幼年時代から辛亥革命までの年代の連続した十篇の自伝的回想記とされ、十篇すべてが、一九二六年、すなわち、魯迅が住みなれた北京を追われて厦門へ逃れた年に書かれている。

魯迅自身、その「小引」において、

最初の二篇は、北京の寓居の東側の壁の下で書いた。中間の三篇は、避難中の作で、場所は病院と大工の家とである。後の五篇は、厦門大学の図書館の二階であり、そのとき私はすでに、学者たちから集団の外にはじき出されていた。

と説明している。

今、この十篇を列挙してみると、最初の二篇、「犬・猫・鼠」(一九二六年二月二十一日)と「阿長と山海経」(二六年三月十日)とが北京であり、これは、魯迅自身が「民国以来、最も暗黒の日」と嘆き憤った三・一八事件の直前である。そして、その

後、政府の弾圧を、フランス病院、ドイツ病院、日本病院と転々として避ける中で書いたのが「二十四孝図」(五月十日)であり「五猖会」(五月二十五日)・「無常」(六月二十三日)の作品である。

この間の事情については、女師大での同僚であり、日本留学時代からの終生の友人であった許寿裳が「我所認識の魯迅」や「亡友魯迅印象記」で詳記しているし、何よりも、魯迅自身の四月中旬から下旬にかけての日記に「晚途住德國医院」・「回家省視」・「回家省視、夜至医院」といったことが散見されることで確かめられるが、同時に私はそこに、魯迅の苦しみ、寂しさといったものも感じさせられる。

三・一八後、多くの文人・学者たちが劉和珍ら青年男女の死を悼んで次々と論評した。「口先の叫び声、いずれは殺された事実とともに次第に冷える」であろう論評を。ところが、ひとたび弾圧の嵐が吹くや、たちまち姿をくらまし、北京を離れているのである。それは、まさに「忘却という救い主がやがて降臨する」おもむきであった。

この頃の状況と、文人・学者たちの動向を今少し述べてみると、軍閥政府は三・一八事件が広東政府支持と軍閥政府反対運動に拍車をかけるとみて、いちはやく学者・文化人の弾圧にのりだしている。女師大の同僚、林語堂は郷里、厦門大学の教授となつて、五月下旬、北京を離れ、「語絲」の同人、孫伏園も厦門大学に移っている。また郭沫若はこの時、既に広東大学に奉職しており、続いて北伐軍に参加するといった状況であつた。

しかし、魯迅は「死者がもし生きてゐる人の心の中に埋葬されるのでなかつたら、それは本当に死んでしまつたのだ。」と何んとかして、死者を死者たらしめまい、生かさねばと思つて、他大学の講義は断りながらも、劉和珍の、劉和珍につながる女師大だけは、ねばりにねばつて、学期いっぱい務め、八月二十二日、女師大事件一周年の講演を終えるや、二十六日、後髪をひかれる思いで北京を離れ、厦門へ難を逃れたのである。しかし、その厦門も北京以上に「三國志」的、「妾のケンカ」的、「腐ったドブ河」的であり、わずか四カ月にして広東へと立ち去つてゐるのである。

この厦門での四カ月、もっと正確にいうなら「百草園より三味書屋へ」が九月十八日、最後の「范愛農」が十一月十八日という、それこそ、わずか二カ月間に後半の五篇が書きあげられてゐるのである。

私は、かつて「厦門時代における魯迅と林語堂」という小論で、魯迅と語堂の研究、著作活動を比較し、魯迅の厦門期の仕事量の龐大、且、充実していることに非常な驚きを感じたが、

今、再びそれを強く感じさせられ、同時に、これは何かあるぞ、厦門には「休息に來た」はずだったのに、何故に、かくも「狂い死にせんばかり」に書いてゐるのか、何故に、この時期に、十年も二十年もの昔を回想せねばならぬのか、若しかすると、厦門時代というのは、魯迅の内面に、魯迅の文学に大きくかわる何かがあつたに違ひないと思ふに至つたのである。

さて、「朝花夕拾」について、竹内好氏は「魯迅」(「作品について」)の中で次のように述べてゐる。

……その特徴は、物語的・追憶的、描写的である。「朝花夕拾」は普通に自伝としての面が強調されているようだが、私はむしろ、かなり作品を感ずる。「故郷」系統の小説の延長ではないかと思ふ。しかし小説的意図は「故郷」ほど明らかでない。そこに奇妙に混沌とした何かがある。「朝花夕拾」自体が、小説に現われた二つの中心を反射的に混在させているように思える。その混在は混在のまま、全体としては統一が保たれてゐる。……

私は、魯迅の作品の中で「野草」を重く見る。魯迅解釈の参考材料として、これほど適当なものはないように思ふ。……「朝花夕拾」には愛誦するに足る文章はあるかもしれないが、どちらかと云えば問題は含まぬのである。

私は、この分析にひかれながらも、「どちらかと云えば問題は含まぬ」にひっかかつてしまふ。「野草」と比較しての言であるとしても納得できないのである。

松枝茂夫氏は「朝花夕拾」解題(『大魯迅全集』)の中で、魯迅

の「思い出の記」は流石に並々のそれと違ふと断りながらも、
……かくて彼は暫しなりとも現実の世界から逃避して自分の過去の甘美な世界に遊ぼうと欲したのである。追憶の上ではすべての事物が浄化されて甘美な詩となる。自分の幼年時代から民国革命前後、即ち日本留学から帰国して故郷紹興の師範学校校長をしていた頃までの生活環境をポツリポツリ思い出し、語ったのが本書である。

と解説している。

私には、これも納得できない。「現実の世界から逃避して自分の過去の甘美な世界に遊」ぶなどとは全く異質のもっと何か苦しみ、もがいているもの、何が何でも書かねばならぬといった強いものを感じる。特に厦門期の後半、「藤野先生」や「范愛農」にそれが感じられるのである。

従つて、私には「朝花夕拾」十篇は、単なる年代・回想の連続だけでない、もっと大きな連続があり、一面では、北京時代のそれと厦門時代のそれには何らかの変化があるのではないかと、敢えて言えば、三つにも四つにも変化があり、何かが加わっているように思えるのである。その変化が何なのか、そして逆に大きく連続するものが何であるかをさぐらうとするのが、この小稿のねらいである。

以上の観点から、今一度、作品に即して考えてみたい。

二

最初の「犬・猫・鼠」については、私は、そもそも「フェアプレーは時期尚早」の、再確認並びに女師大事件のまとめとし

て書こうとしたものだったと思う。魯迅は、その冒頭で「犬と猫が仇同士になった動機を調べようとするのは、ただ自分のために冤をすすいでおきたいだけ」と皮肉をまじえて書いている。

「公理」とか「正義」とかの旗をふりかざしながら弱者を食っている、まさに猛禽・猛獣にも劣る御用学者・文士、いわゆる「正人君子」との論争・対決がそのモチーフでありテーマであったと思う。

これについては、周作人も「魯迅小説裏の人物」(二七「狗」)で次のように説明している。

第一篇文章の題目は狗猫鼠。可是文章的内容实在是在说的猫和老鼠、這裏和呐喊裏的那篇兔和猫有点關係、……(中略)

……至於狗、那实在是陪客、恐怕因了那張打落水狗因而引出来的。這与本題本文没有多大關係、但在著者写本文的那時候却是很有意義、……

「犬・猫・鼠」に直接ふれているわけではないが、魯迅自身の「正人君子」たちとの対決の姿勢は、次に引用する「華蓋集題記」からも読みとれる。

……ある人は私にこのような短評を書かなくてもいいと勧める。その好意には私は甚だ感激するし、また創作の貴ぶべきことも知らないではない。……(中略)……もし芸術の宮殿にそんな面倒な禁令があるとしたら、むしろそんなところに入って行かない方がよいと私は考える。それよりも砂漠の中に立って、飛び走る砂や石をながめながら、築ければ大に笑い、悲しければ大に叫び、憤ろしければ大

に罵って、たとえ砂礫に打ちたたかれて満身ざらざらになり、頭が破れ血が流れようとも、時々自分の凝血をなでさすって、それをきれいな模様とも思ったりするのは、中国の文士たちにまぎってシエクスピアのお相伴をしてバターパンをたべるといふ興趣に及ばないものでもなからう。

もちろん、「犬・猫・鼠」には「華蓋集」後半や三・一八の憤りを書いた「華蓋集続編」のような緊迫感はない。むしろ、ゲルマン人の童話を借りて犬猫の仇同士の来歴を語ったり、幼時「鼠の嫁入り」に夢中になったり、猫嫌いになった理由を懐しく描くなど、魯迅の心の余裕というか、遊びすら感じられる。更に末尾の「今はもう進歩したので、猫に遠慮して追払うだけで殴りつけはしない」「この方法をひろげてやれば青年指導の先輩になれる望みがあるらしいが、目下研究中、かつ推敲中……」には緊迫感とはほど遠い小気味よさすら感じられる。この点、李長之「魯迅批判」(四〇五)に次のような分析がある。

「狗・猫・鼠」就是一篇好文章。裏面所包括的東西那末多、可是非常有力量、非常調和、文字極簡短、又帶感情、令人只覺得寧貼、而毫無窘迫之感、他的筆、真是活動極了、像在山峯上跳越似的、……

さて、次にそもそものは論争のつもりで書いた「犬・猫・鼠」が何故にこも余裕のある書き方であるのかを考えたい。

私は、それを女師大事件のまとめとして書くという、今一つのモチーフがあったからだとみている。そして更に、それが「朝花夕拾」という連作をもたらす一つの契機ともなっていると

みるのである。

一年有餘にわたった女師大闘争が幾多の困難・犠牲を経ながら、二十六年一月、勝利をもって終えた。

魯迅は、暗く、激しかった闘争をふりかえり整理しようとした。

裏切り教師、裏切り学生が続出、学校すらもが二校に分裂した闘いの中で、ねばり強く闘いつづけた学生たちを識ったのである。

群衆がそんなものだというのは、由来久しいことであり、将来もおそらくそんなものでしょう。公理も事の成敗とは無関係です。……(中略)……

私はいま、しゃべったり筆を弄んだりするのが、役立たずの人間のすることだとますます深く信ずるようになってきた。どんなに話が道理に合っているようと、文章が人を動かそうと、すべて空しい。たとい彼らがどんなに道理に背いていようと、彼らは事実において着々勝利を占めるのである。しかしながら、世界は真にかくあるに過ぎぬのであるうか？ 私は反抗して、ためしてみたい。

これは「兩地書」二十二信であるが、「公理も事の成敗とは無関係」と十二分に識りながらも、学生の「苦悶」をみるにみかねて、少しばかりの手助けを始めた魯迅が、いつのまにか、ずるずると闘いのまっただ中にのめり込んで、学生ともども、まさに「苦悶・苦悶・苦悶……」におちいる様をみるのであるが、この闘争体験、この学生のエネルギーに接したことが「犬・猫・鼠」を余裕をもって書かせたのであり、同時にこれが、

魯迅をして、自身の「寂寞」や「絶望」に再び疑いをもたせ、幼時にまでさかのぼって自己を問いなおさせた、すなわち、「朝花夕拾」を「犬・猫・鼠」だけに終わらせず連作たらしめて、以後の魯迅の内面に大きくかかわっていくのだと思う。強弁すれば「寂寞」や「彷徨」からの脱出の糸口ともなったと思うのである。

もちろん、これはあくまで「糸口」であって、「寂寞」や「彷徨」からの脱出を問題にするには、「野草」や「彷徨」の心的葛藤や現実の三・一八事件、その後の厦門の状況「兩地書」等を抜きにはできないことは当然である。

魯迅は「犬・猫・鼠」の中で幼時をふりかえり、自分の可愛がっていた二十日鼠を殺した長媽媽のことを書いた。そして続いて「阿長と山海經」を書いた。魯迅は何故に阿長を書いたのか。またどのように描いているのか。

阿長はヒソヒソ話をし、ゴタゴタを起こす女、私を自由に遊ばせてくれなかった女、迷信を腹いっぱいつめこみ、しょっちゅう小言を言い、おまけに寝相の悪い女、まさに旧中国を代表するような遅れた女、憎むべき女中に描かれながらも、作品全体としては、少しもそれが感じられず、むしろ逆に、この上なく懐いている魯迅が見えてくる。

魯迅は何故に阿長に懐しい想いをよせたのか。それは、魯迅が阿長を懐しんで書くうちに、単なる懐しみだけでない、もっと大事なものの、新しい阿長を発見したからではないかと思われる。

「大砲が破裂する」という長毛の話の中の「偉大な神通力

」、そしてまた「山海經」を買って来てくれた時の「神通力」恐らく幼時の魯迅には「真実の偉大さ」、「真実の神通力」は理解できなかった、できるはずもなかったに違いない。それは「文字通りの神通力」であり、全く感覚的なものであった。だからこそ、鼠を殺したのが阿長であったと知るや、「そうした敬意は次第にうすれていった」のであった。だが今、阿長を回想するうちに、迷信や儀式のいっばいつまった女中でありながら、それでいて、古くさい道徳に骨抜きにされていず、長毛であれ何であれ、私らの使い道、私らだって、いざという時には大いに役立つんだという、自信に満ちた、阿長、たくましい土性骨を備えた阿長を発見し、そういう阿長だったからこそ、簡単なことかもしれないが、「誰もしてくれない、なし得なかった」「山海經」を手に入れたのだ」ということを今更の如く気付かされたのではないだろうか。

「朝花夕拾」での回想、そして「連続するもの」、竹内氏の言を借りれば「統一されたもの」とは、まさに、この阿長や、阿長につながる民衆の再発見ではなかったかと思う。それはかつては、気付かなかったもの、大事にしなければならなかったのに、とりこぼしていたものではなかったらうか。更に言えば、自分の現在を支えているものの根源をさぐりなほし、そこから何を大事にし、どう生き、どう闘うかまでさぐろうとしたものではなかったかと思うのである。

三

さて、今、私は「朝花夕拾」の「連続するもの」「統一され

たもの」を「阿長につながる民衆の再発見にある」「かつてとりこぼしていたものの再発見にある」としたわけであるが、「朝花夕拾」第三篇の「孝」の押し売りに恐怖を抱いた幼時の思い出「二十四孝図」や祭の話、地獄の話を書いた「五猖会」、「無常」には、それがどう現われているのか証明できかねている。実はそこに、微妙な変化、ないしは一種の立ち停りのなものを感ずるからである。

この三作には、当時の論敵、陳西瑩一派の、魯迅を攻撃して使ったことばや罵辞を、逆にふんだんに使い、切り返している。その切り返しが実にたくみで、切つて返された方の、苦虫をつぶすさまが目には浮かぶようである。ところが、それでいて、当の魯迅にはこれ又、論争の意図はうすく、ただ祭の話や地獄の話を楽しんで書いているふうなのである。

また、待ちこがれた五猖会を見に行く朝になって「鑑略」暗誦を強い、できなければ行かさんという父の思い出を書き、父の躰なり生き方なりに対する幼時の感情、同時にそれを書いてある魯迅の心情を何がわせるものもあるが、これもはっきりはしていない。三作の主調音は、民俗学というか、民俗的な世界であり、それが伸び伸びと書かれているのである。

ところが、この三作の書かれた時期は既述のように、三・一八後の軍閥政府の弾圧を逃げまわっていた時期であり、一方、「花なきバラの(二)」、「劉和珍君を記念して」などの文章をたて続けに発表し、政府や文人学者たちと文字通り「食うか食われるか」の論戦をかわした時期、「魯迅が本格的に雑文にとりくむ契機となった」時期でもあった。

魯迅は廈門で書いた「華蓋集統編」小序に、

……悲しいとき嬉しいときに歌ったり泣いたりすると同じく、その時はただ書くことによって憤りを消し情をのべた……

といている。

それは確に、現実の憤りや寂寞が大きいからこそ、それを解き沈めるために、自分をはぐくんだふるさとの自然や忘れられない人々を書き、或は自分をとりこにした祭や鬼やをふりかえったのである。しかし、私には、それと同時に「犬・猫・鼠」以来の、この際自分の根源を問いなおすという気持が働いており、より確実に目的地へ到着するための、より確実な強固なものをつかむための、一里塚の意味もあったのではないかとも思えるのである。

四

さて、魯迅は、「ドブ河のように腐った北京」を逃れて廈門に來た。しかし、そこに待っていたものは、面と向かって弾圧してくる敵でこそなかったが、逆に隠微な敵、妾のケンカ的なくだらない学者たちであった。

魯迅は、「ぬれた肌を着るような」といい、こういう相手とは「門を閉じて自分の前の雪だけ掃く方が賢明」と自ら、はじき出ているが、そんな時に「百草園より三味書屋へ」を書いてる。

「百草園より三味書屋へ」については、丸山昇氏の「魯迅」第一章に次の記述がある。

ここに描かれた世界や、「故郷」に見られる閩土の生活など、魯迅が後年描いた少年時代には、意外に土の匂いが濃い。が、このような世界の反面が、大家族の重くよんだ空気であったことは記憶しておかねばならない。というより、その中にいたからこそ、閩土や百草園があのような新鮮さを持って忘れ得ぬ印象として残り、後年閉ざされた社会に囲まれていた魯迅に、そうした社会に毒されていない原初的な生命を持ったものとしてそれらの思い出が浮び上って来たのだと考えた方が事実に近い。(圈点、引用者)

私はこの分析に全く同感である。現実がよどんでいたからという、単なる現実の反映としての逃避というとらえ方でなく、現実の厦門大学のよどみのまったなかにあえいでいたからこそ、新鮮さを失わず、原初的な生命を持つものを大事にし、渴望する魯迅を読みとるのである。そういう意味で、「阿長」と同系列の作品であり、「連続している」と考えたい。

しかし、「父の病氣」や「こまごました事」になるとまた違って来る。

漢方医の騙りをあばき、父の最期をみとった時の心境、そして行太々をめぐる話、故郷を捨て日本留学に至る経過をたどっているのである。しかし、これはもはや、前にみた「目的地へ到着するための一里塚」であろう。既定の道程であつたらうと思ふ。

『両地書』第二集には、厦門の状況に嫌悪を感じるあまり「今後の行くべき道について思いまどう」魯迅の苦惱が吐露されているが、そういうなかで、あまりにも逃避的・消極的な心境

におち入りつつある時、女師大事件、三・一八事件と続いた北京での戦い、それは「犬・猫・鼠」以来、今日まで自己の根源をさぐりなおす契機となった戦いであり、「死者を死者たらしめまい、生かさんもの」とした戦いであつたことに、はっと気付いて書いた作品、それが「藤野先生」であり、「范愛農」であり、「故事新編」の「鑄劍」ではなかつたかと思う。私はこの三作に「こまごました事」以前の作品にない熱情、ポルトの高さを感じている。

さて、藤野先生は、いったいどこがすばらしかったのであるうか。藤野先生の何が魯迅をして、「良心を發し、かつ勇氣を加え」させたのであろうか。

実際の藤野先生は、魯迅を追悼した一文の中で次のように言うのである。

私のことを唯一の恩師と仰いでゐてくれたさうですが、私としましては、最初に云ひましたように、たゞ、ノートを少し見てあげた位のものと思ひますが、私にも不思議です。また、「惜別」と書かれた例の写真についても、

その写真を何時どんな姿で差し上げたのか憶えて居りません。卒業生なら一緒に記念撮影もするんですが周さんとは一度も写したことがありません。どうして手に入れられたでせうか。妻がお渡ししておいたのかも知れません。私もそう言はれるとその頃の自分の姿を見たいように思ひます。

と一見、とほけたように書いているのである。
魯迅は藤野先生をして、

彼の私に対する熱心な希望と倦まぬ教訓とは、小にしては中国のためであり、中国に新しい医学の生れることである。大にしては学術のためであり、新しい医学の中国へ伝わることを希望することである。

と、いかにも学問に国境はないという、インターナショナルな思想をもった、すばらしい人物に描きあげた。それは確にすばらしくなかった日本、すばらしくなかった日中関係のなかだからこそ、すばらしさだったとは思ふのだが――。

しかし、魯迅が眞実、藤野先生に魅せられたのは、こういう、「小にしては……大にしては……」ではなく、「私はたゞ、ノートを少し見てあげた位のもの」とか「写真もいつ差し上げたか憶えて居りません。」という藤野先生、ごく当り前のことをしたにすぎないといった藤野先生、それでいて、学問に対しては、あくまでも厳しい実証性を要求する先生が、先生自身の意識をこえて、魯迅に認識されたからではないかと思ふ。

「物は希なるをもつて貴し」ではなく、留学生だから、日本語が不十分なのは当然と、はっきり「区別」した先生、「物珍しがり」だったり、へつらったり、同情したり、差別したり」でなく、区別すべきははっきり区別すること、そこから始めて眞の連帯が生まれると教えられる思いである。

藤野先生は、中国の偉大な文豪の恩師であり、作品の当の人物であった。にもかかわらず、誇ろうとする気は微塵もなく、換言すれば「世事にうとく、のろま」であったかも知れないが、それしかできなかった。いや、むしろ、そんな「どう生き

るか」など、意識することなく生きた先生であったと思われ

る。

今、晩年の藤野先生を知る門司氏の表現を借りるなら、

度の強い眼鏡の奥にざらりと光る眼光は鋭どく、がっちりしまった口もとから時にのぞく歯が強そうであった。偏屈な変り者の感じであるが、気品と威厳がそなわって一種特異な風格を成していた。……(中略)……明治の日本人の中には、異国人のすぐれた精神が接してただちに感得する精神の光を発する人たちがいたのである。それはきたえぬき、みがきあげられた精神がゆつたりとして静かな微笑を通じて発する輝きであつたらう。明治は貧しく、一徹な意志と激しい情熱で目的を追求し生きぬいたが、洋々と広く、悠々と静かな東洋の情緒をたたえていたと思ふ。である。氏の印象こそ、魯迅の「藤野先生」のイメージにびつたりと思われる。

さて、私は「藤野先生」という作品は、魯迅が厦門にいたからこそ書けたのだと思つている。なぜなら、現実の厦門大学の教授陣のよどんだ空気のなかに、仙台での幻灯事件がいっそう隠微な形で続いているのを見たからだと思ふ。

この厦門の隠微な敵のなかで、どう生き、どう闘うか、そこで魯迅は、かつて阿長の「眞の神通力」を発見したごとく、とりこぼし、忘れかけていた藤野先生の、あのすばらしくない日中関係のなかでの、あの「生きざま」を今更のごとく感じとつたのではないかと思ふ。

それは革命への勇気などというものではないかも知れないが

「生きざま」であり、「闘いのありよう」を知らされたといつてもよいと思う。

最後に「范愛農」はどうであろうか。

それは、「辛亥革命前後の重苦しい空気を不遇な友人の思い出に托して」描いたとされ、「にせの革命からはみ出した知識人のシンボルとして」書かれたともされているが、そこには徹底してアウトサイダーで生きた愛農が描かれている。もちろん、それでも、「光復後の紹興を見物するんだ」と満面に笑みをたえる愛農もあった。師範学校の学監として、「相交らずの木綿服ではあったが、酒もやめ、てきぱきと働いた」愛農もあった。しかし、それも東の間、にせの革命は愛農を追放し、死に追いやってしまうのである。

それを書く魯迅の心中には、「俺の方が、むしろ利巧に生きていた」という恥じらい、或は責めのようなものがみなぎっており、単に死者、愛農を追悼するだけでなく、「何んとかして生かしたい。生かさねば」といった気持がみなぎっているのである。というのは、愛農は既に「彷徨」所収の「酒樓にて」

(一九四)の呂緯甫や「孤独者」(一九二五)の魏連殳に投影されているのである。それを再びこの二六年十一月という厦門期に書いたことから、魯迅の並々ならぬ決意があったとみるのである。すなわち、それが「小引」にいう「後の五篇は、厦門大

学の図書館の二階であり、そのとき私はすでに、学者たちから集団の外にはじき出されていた。」という気持ちであり、それは実は、学者たちの集団から、「はじき出され」もしたが、むしろ、自らも「はじき出」たのであり、再び、「別種の方法に

よる戦闘」開始の決意であったと考えるのである。

五

以上私は「朝花夕拾」十篇をみてきたが、そこには、単なる回想とは異質の、自己の根源の問いなおしがあり、そのなかで、「民衆の再発見」や「とりこぼしていたものの再発見」があった。しかも、それが厦門期の後半からは、「死者を生かすための闘い」、自分自身の闘いのありようにもつながっていくという、大きな連続・大きな統一があったとみるのである。もちろん、その間には、「微妙な変化」か「一種の立ち寄り」とみられる作品もあったが、実はそれも、心棒をより確実な強固なものにするための一里塚であったのである。

以上のことから、「朝花夕拾」の文学世界は「呐喊」や「彷徨」の世界に勝るとも劣らぬ確たるものとして存在しているといえよう。

付記

魯迅からの引用は、岩波書店「魯迅選集」(竹内、増田、松枝編集)の訳文によっている。

註

- (1) 「花なきバラの口」(『華蓋集続編』)
- (2) 「死場所」(『華蓋集続編』)
- (3) 「劉和珍君を記念して」(『華蓋集続編』)
- (4) 「魯迅日記」一九二六年五月十九日「……社女師大饒別林語堂茶話会……」

同年七月一日「上午得語堂信、六月二十一日厦門発。」より推定。

- (5) 『兩地書』第41・46信、孫伏園「憶魯迅先生」
- (6) 「空談」(『華蓋集統編』)
- (7) 『兩地書』第60信
- (8) 長崎造船大学研究報告第11卷第2号
- (9) 『兩地書』第102信
- (10) 「廈門通信」(『華蓋集統編の統編』)
- (11) 女師大鬪争については丸山昇「魯迅」に詳記されている。
- (12) 川上久寿「魯迅研究」「魯迅の雜文」
- (13) 『兩地書』第95信
- (14) 『兩地書』第42信
- (15) 『兩地書』第73信(16)「鑄劍」のモチーフについては拙稿「鑄劍と廈門時代」(長崎造船大学研究報告第13卷第2号)で記した。
- (17) 藤野殿九郎「謹んで周樹人様を憶ふ」(『文学案内』昭和十二年三月)
- (18) 門司勝「藤野先生の思い出」(『中国文学論集』第三号)
- (19) 竹内好「朝花夕拾」解説(岩波書店『魯迅選集』第二卷)
- (20) 松山久雄「魯迅」第四章「ある孤独者の死」
- (21) 「空談」(『華蓋集統編』)